
落花流水、鳴くや仏。

福沢 御崎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

落花流水、鳴くや仏。

【Nコード】

N2722U

【作者名】

福沢 御崎

【あらすじ】

妖怪退治屋設楽正間と、その仲間の御嚙。

元々は他のサイトで載せていましたが、転載しました。（まだ重複）

壱／壱

——妖怪退治は設楽正間に。

ト或町。ト或村。ト或山。

ト或昔々に、設楽正間という男が居た。

さてさて。ト或昔の妖怪退治屋、設楽正間を知っているか？ それはそれは、それはもう大層な腕利きでね、町村の人からは何かと頼りにされていたのさ。

そんな頼りにされていた彼は、何処までも面倒くさがりで、捻くれ屋。それでいて誰よりも人嫌い。

しかしだな、コヤツは——。

「悪霊退散！ ……つてか？」

にやりとほくそ笑む男は、

と或昔々の、妖怪退治屋。

今は昔、式紙遣いの設楽正間といふをとこありけり。

——今では、遠い昔のことになってしまったが、式紙を操る、式紙遣いの設楽正間という男が居た。

男の別名は、退治屋設楽。彼のことを知っている者は、必ずそう

呼んだ。

そしてこの男。村を襲う忌まわしい妖怪共を、式紙と術何かを手玉のように操っては、華麗に退治をしていた——が、「村の為だ、無償^{タダ}でいいぞ」何て優しい笑みを浮かべて依頼を受ける程、気の良い男では無かった。

……へえ、この男が気になりますか。物好きな方も居るもんですねえ、どれ一つ。

チリ————ン……と、鈴の音が鳴ったら彼が来たという証。この音を聞いた村人達は、口々に言うのだ。

「妖怪退治をしてくれまいか」「退治屋だ。どうかで妖怪が出たぞ」

ヒソヒソ、ヒソヒソ。

設楽は村人のそんな言葉を聞くや否や、はっはっはっと口を大きく開けては、

「あゝ、無償ではありませんよ？ それなりの報酬は戴かねば」

静かに笑みを称えるは、彼の印。

夏にぴったりの御伽噺。

一に退治、二に正問。三に妖怪。

えんやそれ、噺のはじまりはじまり——。

壱／壱

—

ある春の日。

煌々と、畑に陽の光を差し込んでいた太陽が静かに沈んでゆく。
昼の終わりを告げる鴉が、西の空へと消えて行く。もうじき、陽が
暮れそうになっていた。

『今日も一日、お疲れ様でした。』と、畑を耕す者達は心中で御
礼を上げ、自分等の住む小さな家や小屋へと帰りゆく。
そろそろと、皆、畑から出てゆく。

畑。厳しい寒さの冬を乗り越えた麦が立ち込める、大小散り散り
の畑。暖かかった昼間はもう無い。涼しい風が、辺り一面に広がる
畑を優しく撫でた。黄金色の麦畑は、夕陽の紅色がよく映える。そ
の上を、鴉がカアカアと鳴き声を上げて、飛んでいる。

もう、日が暮れそうなこの道。
もう、日が暮れそうなこの畑。

——不思議なことに、子供一つ子見当たらな。昼に駆け回
り、コマを回して遊んだり。そうして存分に遊んだ後に帰って行く
子供の姿が、見当たらない。
この時間帯に、帰り道を急ぐ子供の姿が見えても可笑しくは無い
のに。

「ハアッ、ハアッ……」

そんな異様な光景の中、真つ赤な絨毯じゅうたんが敷かれたような道に、一つの小さな人影が浮いた。パタパタとはあはあと、息を喘がせながら駆ける身体。歳は、四つ五つ程。前髪を振り乱しながら、走っている男の子。赤い道を、ただもう急かすように、一心不乱に駆けている。

早く家に帰りたい、お腹が空いた。そんな心が思いが少年の足を動かしているのだろうか。

——いんや、違う。

少年の顔には、じっとりとした脂汗と、恐怖が滲み出ている。嫌な汗だ。

「早……、ツク」

家に帰らないと。少年は掌てのひらを力強く握り締め、腕を懸命に振りながら走っている。

目からは、大粒の泪が溢れていた。

「嫌だ」

ぽつりと吐かれたその言葉。

少年の表情と言い様は、これから自分の身に何が降り掛かってくるのか、襲い掛かってくるのか——まるで、『未来を知っているから』と言っているようにも見えた。

或、春ノ日。

女子供は、あの妖怪に気をつけねばね。

二

緑生い茂る尾身山の畔には、小さな小さな蔵が在る。

人一人眠るのがやつとこさなその蔵は、何十年昔からあつたのだらうと思わせる程、ボロツこい。

しかも、所々木の板が剥がれていてみすばらしい。点々と欠けている板からは、多量の光が漏れている。これでは、夏の季節の時には、暑さと陽の昇りが早いせいでよく眠れず。冬の時期には、隙間風が寒くて眠れないだらう。

こんな場所、そんな小屋に誰が住むのだらう。いや、皆避けるだらう——が、『それが良いんじゃないかねえか』と、好き好んで住まう者が居た。

「んア？」

ぼさぼさの長い髪が、薄汚れた煎餅布団の上に散らばる。半目に半開きの口。？そこに住まう者？が、雀と鶏の鳴き声に起こされた。気の抜けた気だるそうな腕で、男は前髪を掻き揚げた。

この男の名は、したろうま設楽正間。

「いい加減、新しい布団でも買うかねえ」

欠伸混じりで紡ぐと、正間はむくりと体を起こして、関節をポキリ、ポキポキと鳴らした。微かな呻り声を上げ、肩を回しながら息を吐いた。

「着替えるか」

のそつと立ち上がり、畳んであった黒い着物を掴んで放り投げる。着物は、ふわりと宙を舞って、ぽすりと布団の上に落ちた。

正間は、それを横目で見て、

「くあつ……」

欠伸を一つ、漏らした。

ちらりと見た先には、昨夜、正間が無造作に投げた濃いめの黒い襦袢。それを拾い上げ、身に纏った。そして、先程投げた着物を上から着つけ、紐帯で結んだ。

藍色の紐帯がよく似合う着流しだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2722u/>

落花流水、鳴くや仏。

2011年10月9日08時14分発行